

果実・種子散布に関する話題から —北陸地方における果実資源と果実食鳥類の多様性と分布の動態—

木村 一也

本報告では、金沢大学21世紀COEプログラム（課題名：環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測）で取り組んだ、観察ネットワークを利用した果実生産と果実食鳥類のモニタリング調査について紹介した。

里山生態系にみられる生物間相互作用のうち、果実とそれを食べて種子を散布する鳥類の相利共生的関係は、豊かな生物群集を構築するうえで重要である。多肉果樹種は里山林の主要な構成要素であり、その結実は秋から冬に集中する傾向がある。同時に、北陸地方は鳥類にとって日本海側の主要な渡り経路であり、多くの果実食鳥類が里山林を渡りの中継地として利用していると予想される。それら果実食鳥類は種によって利用できる果実サイズ、生息環境の選好性、季節消長で異なる特徴を示し、多様な鳥散布植物種の地域個体群維持に貢献していると考えられる。

近年、森林性鳥類の多様性の減少が数多く報告される中、人間活動による森林の構造、面積、連続性の変化が生み出すハビタットの喪失、さらに餌資源の不足や生物間相互作用の変化による効果が強調されている。本研究では、果実食鳥類の分布を決定する要因として果実資源の地域規模的な配置を取り上げ、両者の対応関係について考察をおこなった。

調査は、中山間域から低地にかけて位置する10カ所の林分で、2003年から2005年に渡っておこなった。特に鳥の調査では、9人の方々に観察協力を依頼して、同時観察をおこなった。その結果、果実食鳥類は時間・空間的に変化する果実生産量を柔軟に追跡しながら移動し、移動の主要経路が存在する可能性が示唆された。局所的規模から地域規模に広げて長期観察したことによって、両者の相互関係が比較的安定していることが明らかとなったが、調査地すべての飛来鳥数の動態が一連の果実生産パターンからのみ

で推定するには至らなかった。都市や農村、平野部や山間部での分布傾向の違いも概ね認められ、今後は人為的攪乱を加味した景観的要因を考慮することが課題である。